愛国学園大学人間文化研究紀要　第10号　55～65頁　2008年３月号

〔資料紹介〕

カンボジア2007年全国幹部僧侶年次会議を見学して

高　橋　美　和

はじめに

カンボジアの国教である仏教の僧侶組織すなわち僧伽（以下サンガと記述）の、内戦後の特に制度面での再建過程[1]、およびその過程での政府とサンガとの関わりについては、林[1998]や天川[2001]の論考の他、小林[2006]の資料性の高い報告がある。本稿では、視点を変え、サンガ内部の「声」、すなわち今日のカンボジア仏教僧侶たち自身のサンガに対する認識や問題意識を探る一つの試みとして、サンガ公告に注目する。

筆者は、昨年（2007年）12月19～20日にカンボジアの首都プノンペン市で開催された第16回全国幹部僧侶年次会議[2]を見学し[3]、会議の成果物である公告文書を入手することができた。過去の情報を今のところ持ち合わせていないので、これ以前の会議との比較分析は別の機会にゆずり、本稿では今回の見聞内容と資料とを提示し、若干の考察を加える。

見学に先立って、筆者が若干の期待を持っていたことは、内戦終結以降、増加し続けてきた僧侶人口が2005年に減少に転じたことについて[小林　2006:559]、何らかの懸念や対策案が示されるかどうかだった。結論を先取りすれば、僧侶人口の減少に対する直接的な懸念は、見聞の限りでは無かったかと思う。しかし、会議の最後に提出・公表された公告において、本稿最後に述べるようなカンボジア・サンガの現在の問題意識（の一部）が表明されていると見ることができる。

会議の構成

年次会議のプログラムは、初日午前に開会式が宗教省の向かいにあるチャトムック会議場で行われた後、同日の午後と二日目の全日にわたって、宗教省及び同敷地内にある仏教大学校舎に会場を移して、僧侶の討論が行われ、二日目午後の後半にとりまとめと、公告の作成・配布がなされた。なお、討論は、カンボジア・サンガを構成する二派であるモハーニカーイ派（在来派）とトァンマユッティカニカーイ派（19世紀半ばに王族によってタイから導入された派。以下、トァンマユット派と記述）とに終始分かれて行われた。会議室の場所も別々の建物だった。この二派は、

経典も教義も同一であり、実践内容に根本的な相違も対立もないが、サンガの組織としては別であって、それぞれにサンガの長、すなわち僧王を立てている[4]。筆者の予想に反して――全国会議なので、両派の交流が行われる可能性を考えていた――両派が一同に会して互いの成果を発表・批評し合ったりする場は設けられていなかった。

開会式

資料１は、配布された開会式の式次第を訳出したものである。なお、人名については、位階名や欽定位名に替えて（政治家の場合は省略して）氏名と役職名で記した。

資料１：開会式プログラム

カンボジア王国
民族　宗教　国王[5]

開会式次第
第16回全国幹部僧侶年次会議
仏暦2551年　小暦1369年　亥年　陰暦1月上弦10日
すなわち西暦2007年12月19日水曜日

午前　国王陛下名代としてチア・シム上院議長主宰の下、チャトムック会議場にて全国幹部僧侶年次会議の開会式

7:30　幹部僧侶ならびに宗教省全職階役職者参集
7:40　国内ならびに国際来賓ご到着
7:45　ノン・ガエット僧長[6]ご到着
7:50　ブオ・クリー僧王[7]ご到着
7:55　テープ・ウォン僧王[8]ご到着
8:00　フン・セン首相ご到着[9]
8:05　ヘン・サムリン下院議長ご到着
8:10　国王陛下名代としてチア・シム上院議長ご到着
　　花環贈呈
－僧侶　祝福の読経
－国歌の儀（王立芸術大学生による合唱）
－仏教賛歌[10]の儀（僧侶全員による朗誦）（僧侶・俗人全員起立、合掌）
－クン・ハン宗教大臣による歓迎の辞
－国王陛下名代チア・シム上院議長による開会演説
－僧侶　読経
－会議開催委員会からの謝辞
－来賓のご退場

（終わり）

なお、チア・シム上院議長とクン・ハン宗教大臣のスピーチは原稿を読み上げる形でなされ、その原稿は会場で配布された。

会場の席の大部分は黄衣の僧侶たちで埋められたが、端に宗教省職員（本省ならびに各州の）、後方に白衣に剃髪の俗人女性修行者ドーンチーたちがおそらく30名程度[11]、それにイスラーム教やキリスト教の諸組織からの招待客が座っていた。カンボジアは仏教を国教としているが、信教の自由が憲法に謳われているように、他宗教を排斥するという意味ではなく、こうした全国的な宗教行事開会式などには他の宗教関係者にも敬意を表して招待するようである[12]。また、ドーンチーは寺院で修行生活を送る人々であるが[13]、開会式への参加に招待されたのみで、開会式が終わると、他の宗教界の人々同様、全員会場を後にした。したがって、僧侶の討論会は若干の俗人オブザーバー（その多くが宗教省職員）がいたのみで、ドーンチーの参加はなかった。このように開会式には他宗教関係者を含め様々なカテゴリーの人々が招待され、出席できるが、中身の討論会の担い手はサンガ成員すなわち僧侶のみということになる。

宗教省職員に尋ねたところ、この会議に出席し討論会に参加する僧侶とは、カンボジア全国の州および市の僧長（メーコン）とそれぞれの下位単位である郡もしくは区の僧長（アヌコン）を務める僧侶たちである。筆者の観察では、出席した僧侶は高齢者から若手まで広い年齢層から成っていた。以下に訳出した公告によれば、モハーニカーイ派の討論会に出席した僧侶と宗教省職員（州・郡）は合計234名、一方トァンマユット派の討論会の方は合計102名参加した。両派合わせて336名ということになる。

国歌の儀では、王立芸術大学の（おそらく声楽専攻の）学生5、6人による合唱を参加者が着席のまま拝聴するというものであった。国歌を全員起立・斉唱しないというのは、筆者にとっては驚きであった。続く仏教賛歌の儀では全員が起立・合掌し、僧侶たちによって朗誦されたのときわめて対照的である。

また、開会式の最後、式次第は終了していたが、モハーニカーイ派の僧王テープ・ウォン師が、壇上にて着席のまま、演説というのではなく、僧侶たちに語りかけるような口調で、仏教サンガの二派は互いに協力し合って、会議を成功させてほしい、国家・宗教・人民を支え発展させるために力を合わせてほしいという内容のことを伝えた。プログラムで予定されていなかったにもかかわらずなされた、このかなり長めのスピーチの真意は不明であるが、師は別の会議（ボンティエイミエンチェイ州で行われた世界宗教者会議）の共同議長として出席するために開会式を最後に退席したので、去る前に一言発言しておきたかったのかもしれない。なお、テープ・ウォン師の退席にともない、モハーニカーイ派討論会は僧長のノン・ガエット師[14]が統括し、公告の署名も行なった。

討論会

討論会は、各派それぞれの会議室に集まって行われた。モハーニカーイ派の方は人数がきわめて多いため、部屋からはみ出して着席する僧侶もあった。トァンマユット派の方は人数が少ない分、空間に余裕があり、また少

人数で発言しやすい雰囲気があった。パソコンとプロジェクターがあり、書記が打ち込む討論内容が即時スクリーンに映し出されていた。声明文作成の時、スクリーン上の文章を見ながら、トァンマユット派の僧王ブオ・クリー師自らが他の僧侶と一緒に文言の加筆修正作業に加わる様子が、いかにも現代的であった。

討論会のプログラムは配布されておらず、あらかじめ決まった議題はないように見受けられたが、討論の進行役の僧侶の方で何らかの準備があった可能性はある。また、後に述べるトァンマユット派僧王の「(僧侶委員会を立ち上げるという）提案」については、委員会設立に賛成の僧侶の挙手が求められたが、厳密な多数決による決定ではなく、形式上の挙手であった。この委員会の件は、公告にも記載されたところからみて、少なくともトァンマユット派の方では僧王の意向が強く反映されている。

僧侶の発言の順序がどのようになっているのか定かではなかったが、州ごとに、それぞれの州の問題点や取り組み、意見などを発表し、そのそれぞれについて僧長ないし僧王がコメントを述べていた。さらに、部分的に参加した宗教大臣や宗教省の重鎮にも発言を求めたり、サンガ側からの要求（たとえば、僧侶を専門に診察する僧侶病院を設立してほしいなど）を伝えたりしていた。

両派の討論会会場を行ったり来たりしながらの見学であったため、全ての発言を聞くことは不可能であった。特に、モハーニカーイ派の討論会の議長であったノン・ガエット師の発言を聞く機会を持てなかったことは残念であった。したがって非常に不十分な見聞ではあるが、印象に残った指摘や提案を以下に記す。これらのいくつかは、後に掲げる公告の内容にも反映されている。

《モハーニカーイ派》

・律（ウィネイ）がしっかりとまもられていない。住職がしっかりとリーダーシップを取り、律を強化する必要がある。自分の寺院に何人僧侶がいるか把握もしていないような住職がいるのは問題だ。

・カンボジアの仏教は高齢者には人気が高いが、若者の間ではそうではないと聞く。律の強化の他に、寺院という場所を、一般信徒にとっての憩いの場所、訪れるに足る魅力ある場所にするというのも必要ではないか。

・グローバリゼーションの進展によって、キリスト教の布教が盛んになり、改宗者の増加がみられる。何か手をうたなくてもいいのだろうか。

・仏教は国教なのだから、義務教育課程の中に仏教という科目を作って一般の生徒たちに学ばせるべきだ。

《トァンマユット派》

・海外から招聘を受けると私利のために流出してしまうトァンマユット派僧が増加しており、国内での儀礼（たとえば王宮儀礼）での人材不足が起きていて問題だ。

・在家社会の問題は僧侶社会の問題でもある。僧侶が福祉に貢献することは重要だ。困っている在家信徒と苦楽を共にするという考え方が必要だ。我々は病んでいる人々のところへ招請されずとも行って何かできることをしよう。貧しい人や重い病気の人のために読経したら布施は辞退しよう。また、こうした奉仕

活動をするには、委員会の設立が必要である。この委員会は、人々の肉体面・精神面での健康および環境問題に取り組む委員会である。少数派である我々が円滑に奉仕活動するためには、行政（宗教省）との協同が必要だ。（僧王ブオ・クリー師の発言）

なお、開会式にはテレビ・カメラが入っていたので、その日の国内ニュースとして放送されたと考えられるが、討論会の方は、筆者の見る限り、テレビの取材はなかったようである。また、各派で発表された公告の内容も、一般社会に向けて発信されてはいないようである。公告は宗教省で記録として保管されるほか、州や郡の宗教事務所を通じて各派の寺院に配布されるらしい。

二派の公告文書

以下に、両派の公告を訳出したものを資料2、資料3としてそれぞれ掲載する。いずれも原文はカンボジア語で、パソコンで作成され印刷された上、末尾に印章および署名が加えられた。

資料2：モハーニカーイ派公告

カンボジア王国
民族　宗教　国王

サンガ公告

第16回全国幹部僧侶年次会議は、ノロドム・シハモニー国王名代チア・シム上院議長の主宰の下、プノンペン市チャトムック会議場にて2007年12月19日朝、開会式を執り行った。会議は仏暦2551年・小暦1369年・亥年・陰暦1月10～11日、すなわち西暦2007年12月19～20日の二日間行われた。全員参加の年次討論会は、カンボジア王国僧長を議長に、全国の州および市からの幹部僧侶と宗教局職員総数234名を招聘し、宗教省会議室にて行った。討論会における全員での活発な討論と意見交換を経て、第16回全国幹部僧侶年次会議は今後一年間に実施するための公告を決定した。要点は以下のとおりである：

1．全ての寺院は勤行すなわち朝夕の読経および半月に一度の布薩行[15]を行わなければならない。全ての寺院の住職は波羅提木叉[16]を学び、また僧侶の戒条学習を推し進めなければならない。
2．全位階の幹部僧侶は、仏教の教えを盾として、偽出家、不適切な場所での托鉢、寄付集め、あらゆる形態の詐欺行為などの全ての規律違反行為に対する処置を講じ、また、他宗教からのあらゆる侵害行為[17]を防がねばならない。
3．全位階の幹部僧侶は、様々な問題を解決するための明確な会議の時間を設けなければならない。生じたもめ事は、幹部僧侶の職階序列を通して解決しなければならない。
4．住職あるいは僧房長は、毎年統計・名簿を作成し、上位に伝達することによって、寺院内もしくは自分の僧房での寄宿を願い出ている比丘、沙弥、その他の学生生徒の、身分証明書をしっかりと検査しなければならない。

5．全ての寺院の住職は、郡管区僧長（アヌコン）承認の下、効果的な管理の強化をめざして、自分の寺院の内部規定策定の準備をしなければならない。
6．全位階の幹部僧侶ならびに住職は、仏教教育課程の強化拡大に参加しなければならない。まだ仏教教育課程を持たない寺院は、仏教教育課程、特に初等課程を持つ寺院の援助に加わらねばならない。
7．各寺院は、学生僧侶、一般学生生徒、ならびに一般大衆に読書によって知識を与えるために、図書館を開くことに努めねばならない。
8．出家者は、各地域の学校やコミュニティーにおいて、学生生徒、青少年、ならびに一般大衆に対して、道徳教育の分野に参画しなければならない。
9．全位階の幹部僧侶は、学校・道路・灌漑・病院などのインフラ開発において、コミュニティーとともにあらゆる方法で参画しなければならない。
10．全職階の幹部僧侶は、貧困者、孤児、障害者、ならびに様々な災害の被害者に対して救護品を分け与え、援助することによって、人道的な活動における模範を示さなければならない。
11．このサンガ公告は、下記署名の日より効力を発する。

仏暦　2551年
12月20日プノンペン市にて作成
西暦　2007年

国務大臣
宗教大臣
クン・ハン

カンボジア王国サンガ僧長[18]
ノン・ガエット

資料3：トァンマユット派公告

カンボジア王国
民族　宗教　国王

サンガ公告

第16回全国幹部僧侶年次会議は、ノロドム・シハモニー国王名代チア・シム上院議長の主宰の下、プノンペン市チャトムック会議場にて開会式を執り行った。会議は仏暦2551年・小暦1369年・亥年・陰暦1月10～11日、すなわち西暦2007年12月19～20日の二日間行われた。全員参加の年次討論会は、カンボジア王国トァマユット派僧王ブオ・クリー師を議長に、全国の州および市からの幹部僧侶と宗教局職員総数102名を招聘し、プノンペン市宗教省敷地内にあるシハヌーク仏教大学の会議室にて行った。討論会における全員での活発な討論と意見交換を経て、年次会議は今後一年間に実施するための方針を発表する。要点は以下のとおりである：

1．サンガ組織の強化
イー団結の強化：カンボジア王国全ての寺院におけるトァンマユット派の幹部僧侶および全ての位階の僧侶は、忍耐・相互理解・寛恕を意識して、実践[19]と寺院の開発とがいっそう発展するよう団結力を強化・拡大しなければならない。

ロー実践の強化：トァンマユット派僧侶は、仏教の出家者としてふさわしく、老少や職階の序列に従って、互いに尊敬し合わなければならない。
ハーサンガ組織委員会の設立：この委員会は、宗教省および関連研究所との協同にて、カンボジア王国トァンマユット派ブオ・クリー僧王の管理下に存在する。

2．仏教信徒の福祉
イー寺院の健康と衛生の保全：仏教信徒社会の福祉のために、僧侶は、布施堂、僧房、寺院境内、使用品と飲食物の整理整頓と清掃に努めなければならない。
ロー貧しい子どもや孤児たちの援助：カンボジア王国全国のトァンマユット派の全ての寺院は、貧しい子どもや孤児たちに対して援助・救済をしなければならない。
ハーエイズ感染者・発症者の援助：カンボジア王国全国のトァンマユット派の僧侶は、エイズ感染者・発症者に対して、励まし、相談にのり、経を読み、仏陀の教えや救護品を与えるなどして、慈悲を持って援助しなければならない。
ニー家庭内暴力の阻止：それぞれのコミュニティーにおいて影響力を有する僧侶は、暴力行為がある家族に対して、慈悲を持ち助言を与えなければならない。
ホー高齢者の援助：カンボジア王国全国のトァンマユット派の全ての寺院は、高齢者をはじめとする仏教信徒全般に対して、配慮、援助、助言、そして幸福を与えなければならない。
ヘートァンマチャック・ルアン委員会[20]の設立の決定：この委員会は、カンボジア王国トァンマユット派ブオ・クリー僧王の指導の下、必要に応じて、また非常事態の際に、僧侶ならびに一般の仏教信徒の苦しみを緩和することを助けるために設立される。
　この委員会は、重篤な病の僧侶の困難を解決するために、宗教省と協同する。
ここに決定した僧王公告は、高い効果が得られるよう実施しなければならない。

仏暦　2551年
プノンペン市　12月20日 ――――
西暦　2007年

国務大臣
宗教大臣
クン・ハン

カンボジア王国トァンマユット派僧王
ブオ・クリー

考察

二派を比較すると、共通点としては、両派ともに、①寺院内の改革・改良とともに②一般仏教徒社会への関与を実践の射程に入れている、ということが挙げられる。モハーニカーイ派は①に重きがあり、記述がかなりの詳細にわたっている。特に項目1、2、5からは、僧侶の規律の乱れの問題が深刻である現状が読み取れる。実際、僧侶の不適切な行動については、ここで出典は明示できないが、新聞報道もなされてきた。一方、トァンマユット派の方は委員会の設立など具体的な記述が見えることから、比較的②に重きを置いていることが見て取れる。

なお、トァンマユット派公告の文章では、

１の「ハ」と２の「ヘ」の部分に、それぞれ一つの項目として委員会の設立の決定が書かれており、そこまでに書かれている諸項目との関係が明確でないが[21]、討論会で筆者が聞いた内容から補足すると、それぞれの活動内容は、上の諸項目を含む。たとえば、２の最後に記載されている「トァンマチャック・ルアン委員会」の活動内容は、それに先立って書かれている諸項目、すなわち孤児やエイズ感染者への援助活動などを含む、と理解される。

東南アジアの上座仏教圏諸国、すなわちミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアでは、若い男性の出家慣行により一定の僧侶人口が保たれてサンガが組織され、寺院の担い手として仏教徒社会を支えている。しかしながら、妻帯可能な日本の多くの宗派と異なり、「息子に継がせる」方式が存在しないこの地域では、出家も還俗も全くの本人の自由意志に基づくものであるため、制度的なサンガ成員補充は本来的に不可能である。

かつて内戦以前には「(功徳を積むことによって）親に恩返しするために出家する」という表現があり、成人して結婚する前に寺院生活を経験するという慣行が広く行われていたカンボジアであるが、現在はそうした、出家＝功徳を積む、という意識で僧侶になる若者はおそらく少数派である［高橋　2000:83－84]。現在カンボジアに存在する僧侶のおそらく半数以上が若者であると考えられるが[22]、若者の出家の主目的は寺院で提供されている仏教教育課程に入って教育を受けることである。

カンボジアでは、経済的事情や交通手段がないために遠くの学校に通いきれないなどの理由で、一般教育課程のうち、特に農村部での中等教育課程への進学率が依然として低い[23]。学習意欲があり、また農業以外の職につきたいと考えている少年たちの取り得る道の一つは、出家して僧侶となり、寺院で開講されている仏教教育課程（普通科目も含まれる）に進学することである。寺院はほとんどの村にあり、しかも僧侶になれば生活費・授業料は基本的に不要である。しかも、仏教教育課程は初等から高等までカリキュラムが整えられており、各課程の試験に合格しさえすればプノンペンにある仏教大学で学ぶこともできる[24]。

一方、カンボジアでは義務教育の就学率を上げるべく小中学校教育の拡充が進んでおり、その結果、一般の教育制度で学ぶ生徒が増加してきている。仏教教育課程への需要が今後ますます下がれば、結果として僧侶人口の減少につながっていく可能性がある。

となれば、寺院が社会に広く支えられるためには、なんらかの変革が必要と考えるのは自然の成り行きであろう。僧侶が僧侶としての存在理由を保つための寺院生活や宗教実践上の規律の強化、さらに一般在家社会および社会的弱者のために僧侶としてできる活動を構想する、などなど。上記の公告にそうした変革への意識が読み取れる。

最後に指摘したいことは、この年次会議は幹部僧侶の参加によるものであって、その他の一般僧侶たちの意見が必ずしも反映されていないということである。そうした意味で、この会議で「話し合われなかった」事こそ分析の対象にする必要があるともいえる。たとえば、2007年6月24日にノン・ガエット僧長が発表した、平和行進も含め一切のデモ行進

に僧侶が参加することへの禁止、に関しては疑問の声もあがっているが[Sam Rith & McDermid 2007]、討論会では議題にのぼらなかった。また、2007年には、ベトナム南部のクメール人（カンボジアの主要民族）人口が多い地域、カンプチア・クラオム[25]での仏教信仰の制限に反対するカンプチア・クラオム出身僧侶たちの運動やそれに対する迫害が問題になっていたが[26]、そうした一連の事件に関する言及もまた皆無であった。討論会での議題はもっぱらサンガ内部の状況に限られ、僧侶の政治活動の是非、宗教行政や国外の仏教徒社会に関わる事柄は討議の範囲外ということのようである。これらの点については、カンボジア・サンガの幹部中枢による意思決定の仕組み、現在のサンガとカンボジアの宗教行政機構との関係に関する今後の分析を待たねばならないであろう。

付記：本稿は、科学研究費補助金による共同研究「東南アジア諸都市における宗教の活性化と日常生活の再編に関する比較研究」（基盤研究（B）、代表者：小野澤正喜）の成果の一部である。

1　カンボジアは1975～1979年に当時の民主カンボジア政権により仏教を含むすべての宗教組織が一旦解体されたが、その後復興して今日に至る。

2　カンボジア語でanusangvacchara mohasannibat montreysangkh tuteang prates。小林[2006]では、「サンガ年次大会議」もしくは「カンボジア仏教サンガ年次大会」という訳語があてられている。以下、僧侶の職階名（「僧王」など）も、本稿では小林[2006]と訳語が一致していないものがある。

3　この会議には、参加者受付もなく、「オブザーバー参加者」のようなカテゴリーは特に設けられていない。ただし、会場に入場するには、宗教省が発行する入場券を提示する必要があった。

4　両派の寺院数・僧侶（比丘および沙弥の合計）人数（宗教省2006－2007年統計による）は以下の通り。モハーニカーイ派：寺院数4,102、僧侶人数56,130。トァンマユット派：寺院数135、僧侶人数1,220。

5　カンボジアの公式文書に必ず書かれている文言。

6　これを含め3名の僧侶については原文では職階名でのみ記載されている。職階名は、samdach preah moha somethea thipadey samdach preah sangkheaneayok。（以下、ローマ字表記はカンボジア語の発音に基づく。仏教用語はパーリ語を語源とするものがほとんどだが、本稿ではパーリ語綴りは省略した。）なお、「僧長」は本来全僧侶の長を意味するが、職階の威信という意味では、「僧王」に次ぐ職階である[Chheat Sriang et al. 2005: 72]。

7　職階名は、samdach preah aphiserey sokonthea moha sangkheareachea thipadey。

8　職階名は、samdach preah akkea moha sangkheareachea thipadey。

9　フン・セン首相は出席しなかった。

10　カンボジア（＝クメール）語でsaraphanh。仏教賛歌、と訳出したが、カンボジアでは「歌唱」のカテゴリーには入らず、あくまで経典朗誦と見なされる。寺院建立儀礼などでも朗誦される。なお、タイの仏教賛歌については、加藤[2006]に詳しい。

11　たった一名であるが、呼び止めて尋ねたところ、プノンペン市内のノンムニー寺のドーンチーだった。ノンムニー寺はプノンペンで最もドーンチー人口が大きい寺院である。（プノンペン市宗教局2006－2007年統計によれば113名。）ドーンチーが集住する寺院に招待状が来るらしい。

12　筆者は2005年にイスラーム協会が開催したコーラン朗誦祭をプノンペン郊外のモスクにて見学する機会を得たが、やはり開会式には宗教省局長レベルの職員ならびに仏教関係者やキリスト教関係者が招待されていた。

13　詳しくは、高橋[2006a]参照のこと。

14　モハーニカーイ派の次期僧王と目されている僧侶。

15　ubaosatha-kam。戒律日に布薩堂に僧侶が集まり、戒条（次の注参照）を読む行。

16　pademauk。227条からなる僧侶の戒条。

17　他宗教による仏教徒に対する過度な布教活動を示唆しているのであって、仏教以外の宗教を否定するという意味ではない。

18　モハーニカーイ派という語は記載されない。

19　padebat。ここでは律の実践という意味で使用されていると考えられる。

20　thoammachak（＝初転法輪）＋leuang（＝黄色、つまり黄衣の僧侶）。つまり、僧侶による仏教に基づく活動をする委員会という意味で用いられていると考えられる。この名称は討論会時の僧王ブオ・クリー師の提案による。

21　十分な推敲の時間が取れなかったためと考えられる。モハーニカーイ派公告の方には、あきらかな綴りの誤りも見られた。

22　約6万人いるカンボジア僧侶の過半数が仏教教育課程に在籍している。そのほとんどが若い僧侶であると考えられる。なお、僧侶はすべて男性である。女性の出家は制度的に認められていない。

23　カンボジアの義務教育は小学校6年、中学校3年であるが、2005年現在の小学校純就学率の全国平均が91.9％なのに対して、中学校進学率は26.1％［岡田　2006:264］。

24　ただし、全ての寺院で開講されているわけではない。寺院数は二派合わせて4,000を超えているのに対して、仏教教育課程が開講されているのは2005年現在で540ヶ所である［小林　2006:558-559］。プノンペンに隣接するコンダール州キエンスヴァーイ郡での筆者の調査によると、止住する寺院に仏教教育課程が開講されていない、もしくは受講したいレベルの科目が開講されていない場合、近隣の寺院に通学することでその不足を補うという方法が取られている［高橋　2002:82］。

25　他文献ではカンボジア・クロムとも記載されるこの呼び名はもちろんクメール人側からの呼称である。メコンデルタ下流域は歴史的にクメール民族の領地であったが後にベトナム領になった、という失地の感覚が現在クメール人にもあると言われている。

26　2007年6月に、当時タカエウ州のPhnom Den寺住職であったカンプチア・クラオム出身僧ティム・サコーン師が、ベトナムの国家統一を乱す行動を取っているとして、モハーニカーイ僧王テープ・ウォン師の指示により強制還俗の上ベトナムへ送還され、かの地で拘束された、と報道された事件［Forsyth & Vong Sokheng 2007］。この年次会議の直前、12月17日に、ベトナム大使館前に抗議行動のため集まった僧侶集団と、それを阻止しようとする警察とが衝突し、僧侶6人が負傷するという事件が起きている［Vong Sokheng 2007］。

引用文献

天川直子　2001「ポルポト政権崩壊後の上座仏教の復興過程」天川直子（編）『カンボジアの復興・開発』日本貿易振興会アジア経済研究所 pp.275-288.

Chheat Sriang et al. 2005 *Provatsangkhep Putthsasnabandditr (The Buddhist Institute: A Short History)* Putthsasnabandditr (the Buddhist Institute)

Forsyth, Lachlan & Vong Sokheng 2007 "Monk's abduction leaves Takeo tense" *Phnom Penh Post,* Issue 16/16, August 10-23.

林行夫　1998「カンボジアにおける仏教実践―担い手と寺院の復興―」大橋久利（編）『カンボジア―社会と文化のダイナミックス』古今書院 pp.153-219.

加藤眞理子　2006「サラパン―東北タイの仏教賛歌―」林行夫（編）『東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容―制度・境域・実践―』（科学研究費補助金研究成果報告書）pp. 491-532.

小林知　2006「現代カンボジアにおける宗教制度に関する一考察―上座仏教を中心として―」林行夫（編）『東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容―制度・境域・実践―』（科学研究費補助金研究成果報告書）pp. 533-615.

高橋美和　2000「カンボジア仏教は変わったか―コンダール州における仏教僧院復興過程の諸側面―」『愛国学園大学　人間文化研究紀要』2: 73-89.

――――　2006a「現代カンボジアにおける俗人仏教徒の宗教実践と人生―女性修行者（ドーンチー）を中心に―」林行夫（編）『東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容―制度・境域・実践―』（科学研究費補助金研究成果報告書）pp. 616-651.

――――　2006b「復活した信仰―内戦後の仏教の復興」上田広美・岡田知子（編）『カンボジアを知るための６０章』明石書店　pp. 84-88.

岡田知子　2006「学校へ行こう―就学率と教育制度―」上田広美・岡田知子（編）『カンボジアを知るための６０章』明石書店　pp. 263-267.

Sam Rith & Charles McDermid 2007 "Ban on monk protests called 'un-Buddhist'" *Phnom Penh Post,* Issue 16/13, June 29-July 12.

Vong Sokheng 2008 "Both sides cool down after violent street clash" Phnom Penh Post, Issue

16/26, December 28-January 10.

※なお、注で言及されている宗教省ならびにプノンペン市宗教局統計は、冊子として刊行されておらず、集計表のプリントアウトの形で入手したものである。